

黒井弘騎  
表紙イラスト 白うゝ風い

# 聖天使ユミエル外伝

ヴァージンブレイク

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『聖天使ユミエル外伝 ヴァージンブレイク』  
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『新装版 聖天使ユミエル シャドークルセイド』『新装版 聖天使ユミエルⅡ ダスクリベレーション』『聖天使ユミエルⅢ～Ⅳ』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともに読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# 聖天使ユミエル外伝

ヴァージンブレイク

黒井弘騎

表紙イラスト／白うゝ凪い

二次元ぷち文庫

## 登場人物紹介

### Characters

---

はむらゆみ  
**羽連悠美**

あどけない容姿の少女。光翼天使ユミエルに変身し、エクリプスと戦う。

はむらまり  
**羽連真理**

悠美を母親として見守る。悠美以前に光翼天使マリエルとして戦っていた。

**エクリプス**

性欲の虜となった■女趣味を持つ怪物。

「あらあら、まあまあ。本日は当教会にようこそいらっしゃいました」

夕刻、町外れの小さな教会。聖堂を預かるうら若きシスター——羽連真理は、その日も懺悔を求める訪客を迎えていた。

無名の小さな教会だ。信者は決して多くはない。だが、救いを求めここを訪れるものは、例外なく心の澱を祓われてきた。

それも全て、シスター羽連真理の人徳によるものだ。

懺悔室で彼女と話しあうとき、人々はカーテン越しに理想の母親像を見出すだろう。傷口を優しく癒やし、時には罪を厳しく咎め、そして大いなる包容力で罪も罰も共有してくれる。偉大なる聖母はその母性愛で相手の全てを抱きしめ、最後には全てを受け止めて許してくれる。美しき容貌と偉大なる愛、そして母親ならではの包容力——真理は、まさに聖母と呼ぶに相応しい人物なのだ。

「罪深き者も、卑しき者も、主は全てをお許しになれますわ。全てを懺悔なさい……わたくしも、一緒にお祈りさせていただきますから」

懺悔室のカーテン越しに、優しく語りかける真理。今日の訪問客は、どうやら小さな女の子のようだった。時刻からして学校帰りか、カーテン越しにブレザーと思しきシルエツトと、髪を纏める大きなリボンが見受けられる。

聞く者を心から安堵させる。静かで大人びた対応に対し、

「え、えと……あ、あの。そ、その……えつと……」

懺悔に訪れた少女の返答は、ひどくおどおどしたものだつた。

（あら？ この声は……）

そしてその声は、真理にとってひどく馴染みのあるものだつた。

「悠美……どうしたの？ 珍しいわね、こんな時間に、一人で教会にまで」

「あ……マ、ママ。うん……やっぱり、わかつちやうよね……」

悠美と呼ばれた少女は、なんともぼつが悪そうに答えた。

もじもじと恥ずかしがる姿が、カーテン越しでも簡単に思い浮かぶ。真理は信者に対するものより更に優しく、そして親しみを込めた口調で少女に語りかける。

「あらあら、まあまあ。悠美ったら。当然じゃない」

そう。たとえ姿が見えずとも、少女の事がわからないはずがない。

悠美は、真理にとって一番大切な存在。たとえ血は繋がっていないなくても、何よりも確かな絆で繋がれた、たった一人の愛娘なのだから。

（悠美……）

この子は昔から変わらない。恥ずかしがりで大人しくて、人付き合いが苦手。人一倍寂しがりなのに、自分の思っていることをなかなか言い出せなくて。だけど本当はすごく甘えん坊で人懐っこくて、だからこうしてもじもじとすることしかできなくて。



だが、真理は知っている。

この子は本当は、誰よりも優しくて——そして強い心の持ち主だという事を。

悠美は自分と同じ——過酷な運命を受け入れ、光翼天使ユミエルとして日々戦い続けている。あじけない姿や無垢な性格とは裏腹に、血塗られた世界を生きる戦士なのだ。

人々の幸せを守るため、人に仇なす欲望の影エクリプスを狩る。それが光翼天使の使命。日夜恐ろしい怪物と戦い、負ければその身を弄ばれ魂までもを辱められる。陰なる戦いは誰にも知られることなく、理解されることも賞賛されることも決してない。

本来ならば青春を謳歌する多感な少女時代を、戦慄の日々で塗り潰される。それは心優しい女の子にとって、あまりに過酷すぎる運命だ。だが人々の幸せを守るため、そして大好きなみんなを守るため——悠美は健気にも、自ら天使として戦うことを選んだのだ。

（悠美……わたしは知ってるわ。あなたは誰よりも強い子……わたしなんかより、ずっと。あなたは、わたしの誇りよ）

聖母の胸を、娘への想いが駆け巡る。

死別したはずの母娘の再会——だがそれは、淫惨な悪夢の始まりでしかなかった。復活した影魔王オメガエクリプスの掌中で、為すすべなく弄ばれる天使の母娘。二人の天使は数えきれないほどの怪物に犯しぬかれ、死さえ生ぬるいほどの陵虐を何度も何度も叩き込まれた。

歴戦の勇士であるマリエルでさえ耐えきれなかった、あまりに苛烈な陵辱の嵐。しかしそんな絶望の最中でも、ユミエルは決して諦めなかった。

そして——少女の強き想いは奇跡を呼び、ついには影魔の王を打ち破ったのだ。

戦いが終わった現在、羽連母娘は小さな教会で安らかな時間を過ごしている。

運命と言う名の悪魔に弄ばれ、数多の悲劇に翻弄された天使の母娘。その二人が、今また再び家族として過ごしている。それは二人が何よりも待ち望んだ、ささやかだけど最高の幸せ。羽根を休めた天使たちにとって、ともに過ごす時間はこれ以上ないほどの幸福だった。

だが——。

「あ、あのねママ……。あ、あの……。ね……」

今日、母の元を訪れた悠美の声は、ひどく震えていた。

何かに怯え、竦み、今にも泣き出しそうな——あまりに辛そうな声だ。

「ひ、ひつく……。あ、あう。う、ぐす……」

話している最中に、感情が抑えられなくなってしまったのだろう。少女の涙声は、半ば嗚咽と化してしまっていた。

「あらあら、まあまあ……。そんなに急がなくていいのよ悠美。だからゆっくり話して……。ね？　ここには、神様とママと悠美しかないから……。怯えなくていいのよ」



「う、うん……ひつく。ご、ごめんねママ……わ、わたし。上手く話せないかもしれないけど……お願い。き、聞いてね……」

聖母の物腰は穏やかで、決して相手を急かすようなことはしない。優しく相手を包み込み、悩める子羊の全てをぎゅつと受け入れる。

偉大な慈母の愛に抱かれ、怯えていた少女もゆつくりと話し始めた。

「あの……ママ、こ、ここつて。神様がなんでも聞いてくれるんだよね？ 辛いことも悲しいことも、全部、話していいんだよね……？」

少しずつ言葉を選び、言葉を紡いでいく。その様子は、ひどく痛々しかった。

「だ、だったらね。聞いて欲しいことがあるの……う、ううん。わたし、話したいことがあるの……」

（悠美……。この子、なんて辛そうな声で話すの……）

カーテン越しで、娘の素顔は見えない。だが真理には、今にも泣き出しそうな娘の顔が見えていた。

「悠美……ええ。もちろんよ。ママが聞いてあげる。もう、一人で背負い込む必要なんてないのよ……」

優しく受け止めるように、精一杯の愛を込めて娘に応える。

娘の話したい事が何なのか。伝えるだけでこれほどまでに辛い、けれど聞いて欲しいこ

とは何なのか。真理には、もう察しがついていた。

悠美は優しい、いや優しすぎる少女だ。清らかな純心は、しかしそれゆえにひどく傷つきやすい。戦士として過ごす日々は、無垢な少女にどれだけの傷跡を刻み込んできたことだろう。

エクリプスとの戦いは淫惨に過ぎる。敗北すれば欲望のままにその身を弄ばれ、穴という穴を虐めぬかれ夥しい白濁を注がれる。それは、女の子にとって何よりも辛い仕打ちだ。だが孤独の戦士には、誰かとその悲哀を分かちあうことさえ許されない。

これまでの人生、悠美はその小さな身心に、どれだけの悲しみを背負い込んできたのだろうか。そしてそれが、どれほどに耐え難い事なのか——先代の光翼天使である真理には、同じ女性として痛いぐらいにわかっていた。

（悠美……。わたしは、あなたに少しも母親らしいことはしてあげられなかったわ。それどころか、こんな苦しい運命を背負わせて……）

厳格なる影の狩人でありながら、戦士である前に母親であることを選んだ真理だ。娘の悲痛な思いを感じ取り、聖母自身も心を痛めていた。

（そんなわたしが、今、悠美にしてあげられることがある。だったら……）

これは、同じ運命と背負った天使同士だからこそ分かちあえる悲哀。ならば自分には、娘の全てを受け止める責務がある。

いや——受け止めたい。癒やしてあげたい。母として、愛する娘の心の痛みを。

「悠美。ゆっくり、ゆっくりでいいのよ。ママが全部聞いてあげる。二人っきりの秘密、神様にも内緒だから……ね？　辛いことも悲しいことも全部、ママに話して……ママに聞かせて」

「うん……ありがとう。ママ……」

どこまでも優しく、そして暖かく語りかける真理。そんな母の愛に応え、悠美も決意を決める。触るだけで壊れてしまいそうな、傷だらけの心の扉を開け放つことを。

「あの、あのね……。わたし、今でも忘れられないことがあるの……。今日もそれを思い出しちゃって……。もう、忘れらなくて……。胸が苦しくって……」

そして悠美は語りだす——涙を堪えながら、ゆっくり、ゆっくりと。

「それはもうずっと前……ママから光翼天使の使命を受け継いだばかりの頃の話なの。最初にエクリプスに出会って、そ、それで……。その」

彼女にとって一番辛い、あの出来事を。

「は、はじめてエクリプスに負けて……。け、汚された。犯された日のことなの……!」

※

「ちよいとよろしいですか、その可愛らしいお嬢ちゃん？」

「え……。え？　あ、あの……。わたし、ですか……?」

「ぶひ、ぶひひひ！ あ、安心しろよユミエルちゃん、すぐに殺しやしねえよ。まずは大人しくおねんねしてもらうぜ、目が覚めたらお楽しみだ！」

「くうう……あ、くう！ かはあ、あ……あ！」

勝ち誇るエクリプスの声も、もうよく聞こえない。目の前が暗くなり、意識が遠くなる。(マ、ママ……ごめんなさい。わたし、やっぱりダメな子だ……ママみたいには、なれなかったよ……)

苦い敗北感とともに、少女の意識は深遠へと落ちていった。

※

「う、うう……あ」

どれだけの時間が経っただろう。暗闇の中、ユミエルは氣を取り戻した。

(こ、ここは……わたし……!?)

身体にはまだダメージが残り、呼吸のたび気管が痛む。不安に怯えながら、ユミエルは必死で現状把握に努めた。

視界に広がる暗闇、陰鬱な空気。老朽化し打ち捨てられた家屋の一室に、敗北のヒロインは囚われていた。暗闇でわからないが、大きなソファ―に座らされているらしい。両足は膝で折り曲げられ、背中まっすぐに伸ばされていた。両腕は上方にねじり上げられ、後頭部で一纏めに拘束されている。強固な鉄枷がクラブに食い込まされ、もがいても束縛

は解けなかった。

後頭部で腕を組まされ、無防備に腋下を晒した拘束姿。敗者に相応しい完全屈服のポーズだ。

（……そ、そうだ。わたし、エクリプスに負けちゃったんだ……）

屈辱的な姿勢に、否応なく敗北感を煽られる。自分の甘さが招いた結末に、少女は表情を曇らせた。

（ママ……ご、ごめんなさい。わたし、約束を果たせなかった……）

人一倍純真で、それゆえに責任感の強い少女だ。屈辱的な拘束姿勢のまま、ユミエルは自責の念に打ちひしがれた。だが孤独のヒロインには、もう叱責してくれる相手さえいない。陰鬱な静寂の中、じわじわと恐怖が心に染み入ってくる。

（ああ……わ、わたし。これから、どうなっちゃうの……？）

現実には残酷だ。アニメや漫画とは違う。正義の変身ヒロインが勝利できるとは限らない。敗北した戦士には、一体いかなる末路が待ち受けているのか——母親の最後の姿が思い起こされ、恐怖で心臓が押し潰されそうになる。

座らされているソファアの感触が、そんな不安をいつそう助長した。シーツはいやに柔らかく、べつとりと濡れている。ジメジメした廃屋内の備品だ、ろくに手入れもされていなくて当然だが、その肌触りはあまりにも不快だった。

「う、あ……や。うう、あうう……」

魔物の巢からなんとか逃げようとするユミエルだったが、どれだけ暴れても拘束は緩まない。身じろぐたび、ねちゃ、ねちゃとソファアが撓む。スカート越しに伝わってくる柔らかさと、太ももをじかに濡らす冷たさ。まるで、腐りかけた生肉みたいに気持ち悪い。そして、その感覚は決して間違いではなかった。

「ぶひひい、ようやくお目覚めかあユミエルちゃん？ どうだあ、俺様自慢の肉布団の座り心地はよお？」

背後から、下卑た声音が響いた。近い。欲情した獣の吐息が、少女のうなじを擦った。

「え、え……きやうっ!？」

振り向こうとした瞬間、べろん、と何か濡れたものに首筋を舐め上げられた。おぞましい触感にたまらず悲鳴をあげる光翼天使。戦慄くうなじを、豚影魔の舌がべろべろと舐めしゃぶる。

廃墟の主であるホーグエクリプスは、捕らえたヒロインの真後ろで待ち構えていたのだ。「ユミエルちゃんの寝顔、すぐ側ですつと見てたんだぜ。へへ、無邪気な寝顔も可愛かったけど、今の怯えた顔も可愛いつたらないぜ！」

ニタニタと笑いながら、エクリプスは少女の身体を舐め回した。ネットついた唾液が肌に染み込まされ、荒い鼻息が首筋にかけられる。

「うああ……や！ き、汚い……やめてえ！」

突然の肉薄に、溜め込まれていた恐怖が一気に爆発する。背後の怪物から逃げようと、必死で身悶える変身ヒロイン。だが暴れれば暴れるだけ、下半身がぐちゅぐちゅと肉ベツドにめり込んでしまう。床がぶよぶよと撓み、小さなヒップが飲み込まれていく。

「へへへ、ちよつと舐めただけで可愛い反応だねえ。そんなに暴れて、可愛いお尻俺のおなかにこすりつけて。ぶひひひ、気持ちいいじゃねえか！」

「えっ、ど、どういう事……あ、ああっ!？」

息遣いが聞こえるほどに近い影魔の存在、そして生肉じみた床のブヨつき。視線を下に移し、ユミエルは真実を認識した。

眼下に広がるのは、脂ぎった肉の塊。ソファードと思っていたのは、ホーグエクリプスの肥満した腹だったのだ。巨大な豚男は半身を起こして寝そべり、少女天使をその腹上に乗せている。囚われの変身ヒロインは、豚影魔と背面座位で密着させられていたのだ。

豚怪人の巨軀は、小さな女の子を乗せて余りある。ぶよついた脂肪腹の上に獲物を座らせ、後ろから身体を弄って玩弄する。小さな女の子を抱っこしてあやすようなこの体位こそ、体格差のある女を犯す際にホーグエクリプスが好むやり口だった。

「もう傷も治ったからなあ、それじゃ約束どおりお楽しみといこうぜえ。安心していいよお、俺はちっちゃな女の子の扱いには慣れてるからさあ、ぶひひひ！」



「ひ……や。いや、こ、こんな格好でなんて……や、やめてえ！」

豚男が笑うたび、ぶよぶよと腹肉が波打つ。腰を震わす不快なブヨつきに、ユミエルは嫌悪の声をあげた。ただでさえ不気味だった座り心地は、正体を知った今や段違いにおぞましく感じられた。

（い、いやあ……こんなあ。き、気持ち悪いよお……！）

ホーグエクリプスの腹肉は、ひどく柔らかかった。少しでも身じろげば、身体がズブズブと沈んでしまう。肉のベッドは染み出す脂汗でギトギトに脂ぎり、生理的嫌悪を否応なく煽られた。

逃げようとともかくユミエルだったが、余計にお尻が沈んで肉ベッドにめり込むだけだ。ダメージは未だ回復せず、光翼を羽ばたかせ飛翔することもできない。対してエクリプスは、人外の再生力で傷を完治させている。状況は、絶望的だった。

「無駄無駄、お前はもう逃げられねえんだよ、とんだ甘ちゃんのお天使様。エクリプスを狩ろうなんて身の程知らずのお嬢ちゃんには、少し教育が必要だよなあ？」

「え、え……な、何を……ひああうっ!？」

欲情した笑みを零しながら、両手を伸ばすホーグエクリプス。真後ろから抱きかかえるようにして、巨大な掌が少女の胸房に宛てがわれる。Bカップの幼乳が、豚の掌にすっぽりと包み込まれた。

「何をつて、決まつてるだろお？ エクリプスがやることは一つさ……まずは、ほおれ！」  
 むに、むにゅ。包み込んだ肉鞠を、影魔は左右同時に揉み始めた。野太い指が芋虫のよう  
 うに動き回り、小さなおっぱいをぐにぐにと揉み潰す。

「はう……やあ！ そ、そんなとこ……ひううう！」

（や、やあ……おっぱい触られるなんて……は、恥ずかしいよお……！）

■く純情な少女には、性の知識など殆どない。それでも、小さな乳房を責められるのは  
 恥ずかしかった。いやいやと身体をくねらせ、ユミエルは恥辱に身悶える。

可愛らしい反応を楽しみながら、■辱魔はゆつくりと両手に力を込めていった。野太い  
 指がボディスーツを這い回り、生地越しに幼乳の味を堪能する。未成熟な肉乳はぷにぷに  
 と柔らかく、陵辱に対して何の抵抗もできず撓むだけだ。怯えたように震える従順乳房を、  
 ホーグエクリプスは両手でねちっこく揉み続けた。

「ちっちゃくつて可愛らしいおっぱいだねえ。それにこのスーツのスベスベも気持ちいい  
 ぜ、クセになりそうだよ！」

「そ、そんな……いやっ。へ、変なこと言わないでよお……」

変態的な賛辞に、いつそうの恥辱を煽られる。初心な少女は顔を俯け、頬を赤らめ恥じ  
 入った。

「はは、おっぱい揉まれたくらいで恥ずかしがっちゃって。本当に純真でイイ子だねえユ

ミエルちゃんは。ぶひひひ、まったく虐めがいがあるよ！」

いかにも純情な反応に、いつそうの加虐心をそり立てられる。欲望のまま、暴力的に乳房を搾りまくるエクリップス。黒いスーツに指がめり込まされ、乳房全体を揉み潰すように圧搾する。

「くあ、あつ！ 痛ッ……おっぱい、そ、そんなに強くしちゃ……痛あ、痛いよお！」

胸に走る痛苦に、天使は悲痛な声をあげ苦悶した。少女の性感帯はまだまだ未発達だ。開いてさえいない蕾を力任せに虐められても、痛いだけで肉悦など感じられるはずがない。もつとも、そんな事はエクリップスには関係なかった。欲望の影は、自分の欲望を満たすことしか考えていないのだ。

「ひひ、いい声で泣くねえ。泣き顔も可愛いよおミエルちゃん……ぶひひ、食べちゃいたいぐらいだ！」

痛ましい泣き顔めがけ、豚男はべろんと舌を伸ばした。影魔の肉体は、生物の常識を逸脱する。大蛇のように長大な肉舌が、汚れなき少女の幼頬を舐め上げた。

「やつ……ひああ!? うああ、汚……や、やああ！」

真つ白な肌に、べつとりと大量の唾液を塗りつけられる。豚の舌は太く、塗りつけられる唾液は異常に粘っこかった。生臭い悪臭が、むつと鼻をつく。こんな汚物をお顔に押しつけられ、生理的嫌悪を感じないはずがない。顔面汚辱のおぞましさに、少女は童顔を震

わせ身悶えた。

「んん、やつぱり女[ ]のほったはたまらないなあ。ぷよぷよ柔らかくって、いい匂いさせてさあ。ぶひひ、ふごふごふご」

マシユマロみたいな幼顔をしゃぶりながら、豚鼻を鳴らすホーグエクリップス。ヒクヒクと蠢く鼻先が、ぐっと少女の首筋に押しつけられた。柔らかな肉塊がうなじを這い回り、吸引するかのような勢いで匂いを嗅ぎ回る。

「ひゃうっ!? な、何するの……そ、そんな……ひゃふ、ひゃうんっ!」

未成熟な性感は、快楽には鈍くても擦る刺激にはひどく敏感だ。荒く鼻息をかけられ、おぞましさと同時にゾクゾクする搔痒感を覚えてしまう。耐え難いムズ痒さに、[ ]き天使は顔を震わせ身悶えた。

「ふご、ぶひぶひぶひ。やつばまだまだ[ ]だねえ。甘ったるいママのミルクの匂いが消えてねえ。それに少し汗かいてるなあ。うーん、この甘酸っぱさがたまらないぜ!」

「や、い、いやっ! そんな事言わないでえ……は、恥ずかしい……よお」

無遠慮な品評に、ユミエルは童顔を赤らめ懊悩する。年頃の少女にとって、自分の体臭を揶揄されるのは胸を揉まれるよりなお恥ずかしかった。鼻息をかけられた首筋が、羞恥にピクツと痙攣する。

そんな初心な反応を楽しみながら、ホーグエクリップスは豚鼻を這わせながら体臭を嗅ぎ

続けた。先ほどの戦いで汗ばんだスーツの香りを、鼻息荒く嗅がれてしまう。

「い、いやあ。そ、そんなに嗅がないでよお……ひうう、く、ふ……！」

たまらない羞恥とくすぐったさに、肢体をくねらせる天使。もじもじと恥ずかしげに腰がゆれ、肉マツトとお尻が擦れあう。脂ぎった脂肉に下半身が沈み込み、ブヨブヨした感触に余計不安感を煽られた。

「ぶひひ！ そんな嫌がるなよお、天使様の汗、いい匂いだって褒めてるんだぜえ。どれ、次はこっちも嗅がせてもらうかなあ、ふごふごふご！」

可愛らしい反応を楽しみながら、豚鼻を蠢かせるエクリプス。鼻水まみれの鼻先が向かったのは、無防備に晒されている脇の下だった。

「あつ……や、ひやああ!! そ、そんなトコなんて……ひやふううんっ！」

ぬるっ、べちよ。不気味に湿った豚鼻が、左の腋下に隙間なく密着した。恥ずかしい箇所を隠したくても、拘束された両手は言うことを聞かない。ケープの隙間から曝け出された脇の下に、吸引気管が無遠慮に押しつけられた。

（や……い、いやあ。脇の下なんて……ど、どうしてこんな変なトコばかり虐めるの……は、恥ずかしいよお……！）

悠美は初心で無垢な少女だ。性経験は勿論、性の知識さえ殆どない。それでも、今されていることがひどく淫らで変態的だという事は理解できた。

ぴったりと身体を重ね合わせた状態で、お顔を舐られおっぱいを揉まれ虐められる。汗の匂いを嗅がれて、その上脇の下まで責められてしまうなんて——はじめて味わう恥辱の連続に、清らかな純心はひどく汚されていく。

「ぶひひ。綺麗な脇の下だねえ。どおれ……ふ……ふ……」

「い、いや……いやあ。お願い、や、やめ……」

腋下に宛てがわれた鼻先が、鼻息を荒くする。童顔を揺すつて懇願する少女だったが、当然そんな言葉を聞いてくる■辱魔ではなかった。

野太い鼻先が激しく蠢き……ずるずるずるずるうう！

凄まじい勢いで、脇の下を吸いたてられた。

「ひ、ひゃ、ひゃあああゝ!? そ、そんなあ、そんなに強く……つくひあ、吸われてるううう！」

じゅるっ！ ずる、ずるずるずるずる！

綺麗な脇窪を、バキュームじみた吸引で吸い上げられる。まだ毛の一本も生えていない、鋭敏すぎる急所への苛烈な攻撃。たまらない搔痒感に、ユミエルは金髪を振り乱し悶絶した。（だめ、だめえ！ こ、こんな敏感すぎるとこ……ふああ、く、くすぐったひよお！）

未発達な神経は、優しい刺激にひどく脆い。敏感すぎる部分を集中的に責められ、辛いほどの切なさが駆け巡った。耐え難い快美感に、ピクピクと両手を震わせる変身ヒロイン。

二枚の翼が辛そうに痙攣し、小さな背中が何度も仰け反らされた。

「へへ、まだまだ子供のユミエルちゃんでもやつぱ脇は感じちゃうみたいだねえ。それじやもつともつと可愛がつてあげるからねえ、ぶひひい！」

「ひあ……や、やああ！ も、もう脇なんていや……ひゃあ、はひいひい！」  
じゅう、じゅうううっ！

可愛らしい反応を楽しみながら、ホーグエクリップスは吸引を強くした。同時、柔らかな鼻先を腋窩に押しつけて、マッサージするように愛撫する。更には乳房への攻めも勢いを増し、揉み千切らんばかりの勢いで二つの肉峰を揉み嬲られた。

「ひゃう、だめ、だめえ！ そ、そこそんなに吸わないで……ひゃう、お、おっぱいもお……ひああ、そ、そんなに虐めないでえー！」

恥ずかしすぎる所を激しく吸われながら、同時に乳房を乱暴に揉み責められる。だが、胸で感じたのは痛みだけではなかった。苦痛と同時、脇で感じているような切なさや乳房の中でも増していく。休む間もなく揉まれ続けている乳房は、ほんのりと汗ばんで熱くなっていた。

（やんっ……ど、どうしてえ？ こんな……くううん。イ、イヤなのに……おっぱい熱くって、なんだか、へ、変な気分だよお……！）

とく、とくと胸が高鳴り、おなかの奥がきゅうんと痺れる。



それは性に疎い少女が、はじめて味わう感覚だった。身体の奥が痒くなるような、心ざわめくような。痛いけど、辛いけど、なんだか切なくて甘くて、恥ずかしいけれど気持ちいい。

「ふあ……あ、あはあ。ふあ、ひ、ん……ううっ！」

漏れる声音は苦痛と拒絶だけでなく、甘い媚びを含み始める。羞恥混じりの執拗な愛撫に、幼い性感はその本性を徐々に目覚めさせられつつあった。

（な、なんなのこれえ……こ、こんな気持ち。は、はじめて……え！）

未曾有の感覚に、為すすべなく翻弄される天使。ユミエルがはじめて味わっている感覚は——紛れもない、肉の悦びだった。

「はあ、はう、はう……んうっ！ お、おっぱい……くううん！ いやあ、も、そ、そんなにしないで……ひやう、は、恥ずかしいよお……ん、んんうっ！」

名さえ知らぬ甘悦は、徐々に、だが確実に大きくなっていた。ペロペロとしゃぶられていくほっぺたも、乱暴に揉みくちやにされているおっぱいも、脇の下みたいに切なく疼いてくる。甘い熱に浮かされた幼顔は、ぽつと艶っぽく赤らみはじめていた。

「ぶひひ、だんだん感じてきたみたいだね……どうだいユミエルちゃん？ ふふ、気持ちよくなってきただろお？」

「ひ……や、やあ、知らないっ。そんなの、わ、わたひ……ひああ!？」

そんな可愛らしい変化を見逃すエクリップスではない。快楽を隠せない童顔をべろりと舐めあげると、今度は舌先を少女の唇へと伸ばしてきた。

「えへへへ。キスしようよおユミエルちゃん。そうすりやもつと素直になれるぜえ、ぶひひひ！」

たっぷりと唾液を滴らせた肉舌が、小さな唇に押し当てられる。

「い、いやあ……や。ふう、ん、ん！」

（キ、キスなんて……イヤだよお。そ、そんなの絶対イヤあ！）

初心な少女にとって、キスは愛を確かめあうための高潔な手段だ。ママとは何度かキスをした。それは、悠美にとつてとても大切な思い出。接吻は想い人同士だけに許された、特別な行為だと信じて疑わない。そんな純情すぎる少女にとって、唇への蹂躪行為は嫌悪すべきものでしかなかった。

「い、いやあ……ん、ん！ んぷう……ん！」

ぎゅつと唇を噛み締め、童顔を背けて拒絶する■天使。だがそんな健気な抵抗は、■唇魔を喜ばせるだけだ。唾液まみれの先頭が閉じた唇門をくちゅくちゅと舐め回し、無理矢理に開かせようと虐めてくる。

「ひゃふ……い、いや……んう！ おねがい、やめへ、ゆ、ゆるひ……んぷううう！」  
必死で唇に力を込め、惨めに哀願する口辱天使。唇の隙間から入ってくる唾液の臭いが、

生理的嫌悪をいつそう掻き立てる。お口を汚される汚辱感に、双眸からぼろぼろと涙が零れていた。

「嫌がる顔も可愛いねえ、ユミエルちゃん。もつと虐めたくなっちゃうよ……へへへ、どこまで抵抗できるかなあ？」

「くうう、う……あ、あああううっ!？」

きゅつと唇に力を込めるユミエルだったが、そんな抵抗も長くは続かなかった。コリコリと乳首を弄られ、脇を擦られ追い詰められる。全身を駆け巡る快感に、四肢が痙攣し言うことを聞かなくなっていく。

（やあ、ダメ……!　そ、そんな恥ずかしいことばかりされたら……恥ずかしくて、力が抜けちゃうう……!）

ゾクゾクする甘悦に、抵抗心を蝕まれていく。感じやすいところばかりをねちっこく虐められ、肉体が中から痺れてしまう。もつと強く噛み締めたいのに、唇は戦慄いて淫らかな喘ぎ声を零してしまっていた。

「はあ、はふうう……っひん!　ら、らめ……ん、んぶううう!？」

ぬる、ずぶずぶずぶっ!

その隙を逃さず、野太い肉舌が力任せに押し込まれた。小さなお口が無理矢理に押し開かれ、口腔内にまで突っ込まれる。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**